

私は、30年ほどまえに梅棹忠夫さんや山崎正和さん、小松左京さんらが集まって「中之島芸能文化センター構想」を打ち上げたときのことを思い出しました。この構想は実現しませんでした。西鶴劇場や近松劇場といった大阪文化の伝統を活かしたネーミングを思い出して、「なんだ、中之島芸能文化センター構想は大阪国際会議場で実現しているじゃないか」と気づいたんです。現在、メインホールは「近松劇場」、イベントホールは「西鶴ホール」にしようとして検討しているところです。先ほど、大阪は広報が下手だというお話がありましたが、大阪には文化をしかけるツールがたくさんあるのに、上手にプロデュースされないために一般に知られていな

いのだと思います。ここで見習うべきは、宝塚歌劇をつくった小林一三です。人々の夢とロマンをかき立てながら、事業としてもちゃんと成功させる。今の大阪には、文化を守る一方で、そういうプロデューサーを育てていかなくてはならないと思います。そして新しい文化を掘り起こし、発展させていくムーブメントを起こすことが大事。そうでないと、いつまでたっても大阪には「お笑い」しかないと思われるかもしれませんから。

堀井 勿論「お笑い」も文化のひとつなのですが、市民には、人類が築いてきた沢山の多彩な文化を楽しむ権利があります。子どものうちからそうした文化に親しみ、感性を養うために鑑賞する機会を得る。そうしていい観客を育てることで、伝統の革新作業にはね返していく。そのためのプロデューサーが必要なんです。

### 知的ネットワークを活用

春野 まずは、浪曲を理解できる人が、将来本当にいなくなってしまうのではないかと不安です。例えば「左甚五郎」といっても若い人は知らないですね。浪曲を聴く上での共通認識がなくなりつつあるんです。また、浪曲を学校でやる機会も非常に少ない。学校で教える音楽は譜面のある西洋音楽ばかりで、譜面にはできないけれど日本の伝統的な節（ふし）や声の出し方などはほとんど触れられません。日本の伝統芸能や音楽を知らずに育っていくなんて、本当にもったいないですね。子どもたちには、早い時期からそうしたものに触れさせてあげたいと心から思っています。

佐藤 子どもの教育は社会総ぐるみでといわれますが、大阪では企業や行政が教育現場と身近に結びついていないように思います。一方、大学や企業が



### 大阪センチュリー交響楽団

府民サービスを第一に考えた多彩な企画  
出野徹之 常務理事兼事務局長 談

公立のオーケストラとして、大阪府民に対するサービスを第一に考え、活動しています。定期演奏会を手頃な値段で楽しんでもらったり、子どもや身体の不自由な方には、それぞれに合った楽しみ方を企画。小中学生に楽器体験してもらう『タッチ ジ オーケストラ』や、特別支援学校コンサート、小編成での府立病院の巡回演奏会などはいずれも大好評です。そうして55名の楽団員が、生の音楽を楽しみにされている方々のために、年間110公演とフル稼働しています。

